
マカロニ屋の恋

ガラムマサラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マカロ二屋の恋

【Nコード】

N6475Z

【作者名】

ガラムマサラ

【あらすじ】

マカロ二屋の元へ訪れる娘との恋の行方は。

< 1 > (前書き)

全部でおそろく5話ほどになります。
完結まで毎日更新します。

ある街に、小さな小さなマカロ二屋がありました。

中では若い店主が働いていて、ごくありふれたものからちよつとめずらしいものまで、様々なマカロ二を売っていました。味の方もなかなかいいと評判で常連になるお客も多かったため、そこそこ繁盛しておりました。

マカロ二屋はお昼にはいつも、味見用にゆでたバタあえのマカロ二に、塩をかけて食べていました。一人で食べる冷たいマカロ二は少しさびしい味でしたけれど、特に不満はありませんでした。

マカロ二屋には友人がいました。古いヴァイオリンを持った、気ままで物静かな音楽家でした。時折ふらりと現れては、話をしたりヴァイオリンをいじったりして、またふらりと帰っていきます。そんな音楽家をマカロ二屋は気にしておりましたし、音楽家もまたマカロ二屋を好いておりました。

ある日、お昼より少しばかり前に、見慣れないお客が入ってきました。夜の色をした髪にふくらしたばら色の頬の、色の白い娘です。娘は、小さな穴開きマカロ二を一握り分買っていました。

次の日の同じ時間に、また娘は現れました。今度は、ねじりマカロ二をやはり一握り分買って行きました。

また次の日。娘はいつも通り、お昼よりも少し前の時間にやって来てやはりペンネを一握り分買いました。

「いつもありがとうございます」

茶色の小さな紙袋をわたしながら、マカロ二屋は言いました。娘はぱつと顔を赤らめると、ほほ笑みながら小さな声で

「とても、美味しいものですから」

と言いました。そして、恥ずかしそうに会釈をして出ていきました。

またまたその次の日のこと。

マカロ二屋は、いつも朝起きてすぐに温かなお茶をゆっくり飲みます。そしてだらだらと朝ごはんを食べながら新聞に目を通し、それからちよんちよんと鼻に水をかける程度に顔を洗うと、いつもの仕事着に着替えて出かけます。

ところが今朝は違いました。まず、起きてからまっすぐに洗面台に向かいました。そして、ちびた石鹸を泡立ててしっかりと顔を洗い、ていねいに髭をそり、時間をかけて髪をくしけずりました。そして、鼻歌を歌いながら昨夜アイロンをかけてぱりっとさせた仕事着を着、鏡の前に立つといろんな角度から自分を眺めました。

マカロ二屋は、そのまま家を出ました。途中、顔見知りの小さなパン屋さんで、バターパンとクロワッサンとサンドイッチを買いました。それから、クッキーを少しと小さなマフィンも。

「おや。甘いものは苦手じゃなかったかね」

パン屋さんの問いかけが終わる前に、マカロ二屋は外を飛び出し、飛ぶように自分の店へと急ぎました。この日、いつもよりずっと早くマカロ二屋は店を開けると、そわそわしながらショーケースの後ろに立っていました。

「とにかく女の子というものは甘いものが好きらしいからな」

ぶつぶつとマカロ二屋はつぶやきました。

「いいか、さりげなく言うんだ…もしよかったら、パンをたくさんいただいたので、お昼に少しいかがですか。奥に椅子とテーブルもありますよ。甘いお菓子もあるんですよ。もちろん熱いお茶もいれますよ…」

せわしなくそこらを行ったりきたりしながら、お客の来ていない時間はずっと、マカロ二屋は女の子をお昼ご飯に誘う練習をしていました。

やがて、もういつ娘が来てもおかしくはない時刻となりました。

マカロ二屋は窓の外を見ながら咳払いをし、冷めたお茶で口を湿らせました。一番良い声でいらっしやいませと言うつもりでした。そこへチリンチリンと扉の鐘が鳴ったものですから、マカロ二屋は慌てて姿勢を正すとできるだけ大きな声で「いらっしやいませ」と言いました。

「ポテトのサラダに入れるのにおすすめなのは何かしら」

言いながら入ってきたのは、時計屋の奥さんでした。マカロ二屋はたつぷりと色付きの小さなマカロ二をすくって紙袋に入れ、お代と引き換えに渡しました。

その後もチリンチリンと音がするたびに、マカロ二屋は「いらっしやいませ」と胸を張りながら出迎えました。が、やってくるのはいつものお客さんばかりでした。

窓から差し込む光がだんだんと淡くなり、やがて静かな闇が辺りに訪れました。そろそろ店じまいの時間でした。マカロ二屋はのろろと立ち上がると、ゆっくりと戸締まりの準備を始めました。

「まあ、マカロ二なんてそんなに毎日食べるもんじゃないってことさ」

マカロ二屋は自分に言い聞かせるようにつぶやきながら、表口に出て看板をしまい込み、扉にかけていた「営業中」の札を返しました。そして、店の奥からパンの包みを持つてくると、テーブルに置いてお茶の準備を始めました。長い一日でした。マカロ二屋はとても疲れていました。けれど、一日何も口にしなかったけのにお腹は空いていませんでした。

ふとマカロ二屋は、やかんがシュンシュンと音をたて始めたのに混じって、トントン、と、とても小さな音が聞こえた気がしました。慌てて出入口に行き扉を開けると、辺りの闇と同じ色の髪をした娘が立っていました。娘はマカロ二屋を見上げながら小さな声で、

「貝殻の形のマカロ二を少し下さい」と言いました。

マカロ二屋はすっ飛んで言われた品を袋に入れてくると、娘にそつと手渡しました。お代を手渡す娘の手はとても冷たく、僅かですが震えておりましたので、そこで初めてマカロ二屋は、秋の半ばだというのに娘が薄い服一枚しか身につけていないことに気が付きました。そういえば、なんだかいつも同じ服だったような気がします。マカロ二屋は、娘が寒そうな身なりをしていることに心を痛めました。何とかして暖かな思いをして欲しいとも思いました。

「あの」

気付けばマカロ二屋は、もう一方の手を娘の小さな手に包み込むように重ねていました。

「もし、よかつたら……熱いお茶を一緒にいかがですか」

言った後でマカロ二屋は自分のやったことに気が付いて、耳の辺りまで真っ赤になりました。

娘はひどく驚いた様子でマカロ二屋の顔をしばらく見つめていましたが、やがてにつこりと微笑みました。マカロ二屋は、ばら色の頬にできるえくぼは何て素敵なのだろう、と思いました。

二人は熱いお茶を飲み、冷たく固くなったパンをかじりました。あまり言葉を交わしたりはしませんでした。マカロ二屋はこんなに楽しく幸せな夕食は初めてだ、と思いました。

こうしてマカロ二屋は、毎日娘と共に過ごすひとときを心待ちにするようになりました。とは言っても、昼頃に娘がやって来ては作ってくれるマカロ二入りのスープを、お店の小さな椅子に座って一緒に食べるだけなのでした。けれどもマカロ二屋は、自分が話しかける度に浮かぶ娘のえくぼを見られるだけで、とても満ち足りた気持ちになりました。

こうした最中にお客が来ることも度々ありましたので、そのうちに客の間では、若い店主に恋人がお嫁さんができたらしいと噂が広まりました。実際にマカロ二屋に仲を訊ねていく客もありましたので、マカロ二屋も自然とそのような気持ちになってゆきました。

マカロ二屋はあまり裕福な方ではありませんでした。ですが手持ちのお金を工面して、ある日娘の為に、ふかふかの軽くて上等な上着を買いました。昼間に来ていたとはいえ、娘は相変わらず薄い服を一枚着たきりでしたので、風邪でもひきやしないかと心配だったのです。娘の喜びようといったら大変なもので、幸せそうにそれを羽織る姿を見てマカロ二屋も嬉しくなりました。

「そいつの中身は綿なんかじゃないんだ」

ぼうつとした表情で何度もガラスに姿を映す娘を眺めながら、ここにこしてマカロ二屋は言いました。

「なんと言つても本物の鳥の胸毛が入っているからね、軽くて暖かいだろう」

途端に娘の白い顔が、まるでろう人形の如く真っ白になったかのようにになりました。娘はそつと上着を脱ぐと、

「お気持ちは嬉しいのですが、お返します」

とマカロ二屋に渡しながら、静かに言いました。

「ねえ君」

と、マカロ二屋は驚いて叫びました。

「もう秋も終わりなんだぜ。いつまでもそんな格好じゃ、凍えちまうよ」

「それでも、受け取ることはできないんです」

娘は、悲しそうにつぶやきました。マカロ二屋は何とか娘の気を変えようと、あれやこれやとなだめたり理由を尋ねたりしましたが、娘はただ頑なに首を振るばかりでしたので、終いには腹を立てて言いました。

「そうかい、そんなに僕からの贈り物が受け取れないっていうんなら、もうここには来ないでくれ。君から好かれていたんじゃないかって思い込んでいた僕が、どうにも馬鹿みたいじゃないか」

娘は泣きそうな声でごめんなさいと何度も謝りましたが、マカロ二屋はむすつとしたままでしたので、うなだれながら店を出て行きました。

すぐに、マカロニ屋は娘を傷つけたことを後悔をしました。彼女に謝ろうと思いい慌てて店を飛び出しましたが、もう何処を探し回っても、その姿はありませんでした。

その次の日から、娘が店に来ることはぱたりと無くなりました。

マカロニ屋は再び、お昼にバタあえのマカロニに塩をかけて食べるようになりました。一人で食べる冷たいマカロニは大変さびしい味でした。もう一度でいいから、娘に会って話をしたい、またあのおくぼを見たい、といつもそればかり考えていました。

「調子はどうだい」

そんなある日、音楽家がやってきて、店を覗き込みながら言いました。彼は、久しぶりに会った友人が、ひどく打ちひしがれている様子にすぐに気付き、驚いて理由を尋ねました。

冬の足音が近付いてきていました。

< 1 > (後書き)

マカロニという響きの面白さに一度使ってみたいと思って始めた物語です。

不器用な二人の恋の結末がどう終息するのか見守っていただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6475z/>

マカロ二屋の恋

2011年12月21日21時53分発行